

野山に出かけたら 身体をチェック

昨年末から、西日本を中心に鳥インフルエンザが猛威をふるい、養鶏業に打撃を与えています。シベリアからカモなどの渡り鳥によって運ばれたウイルスが、小鳥、ネズミや昆虫などによって禽舎内に運ばれ発生しているものではないかと考えられています。

同じように、北からの渡り鳥が病原体を運ぶものとして「ライム病」があります。これは、鳥の体について運ばれた病原体（細菌の一種であるボレリア）を保持したマダニに刺されることによって発症する感染症です。「ライム病」という名称は、アメリカ北東部のコネチカット州ライム地区で多発したことに由来しています。日本では、ノネズミや野鳥が保菌動物となっており、マダニ（シユルツエマダニ）が保菌動物から人間へと媒介します。欧米では年間数万人が感染して社会的な問題となっています。国内では、昭和61年に初めての患者が報告されて以来、年間5〜15例程度が北海道や本州中北部から

報告されていますが、実際にはもっと多いと考えられています。患者は、マダニの活動期である5月から8月にかけて多く発生します。症状は、刺されて数日から数週後に患部が赤く腫れ、疲労感、不快感、発熱、咳、筋肉痛、関節痛など様々です。そして、数週から数ヶ月後には神経や循環器系の疾患へと進展し、顔面麻痺が生じることもあります。さらに、数ヶ月から数年後には、慢性的な関節炎や皮膚炎などがみられます。マダニに刺された時、すぐ指でつ



写真1 カシラダカのくちばしの付け根に寄生しているダニ

まんで取りたくなるでしょうが、マダニの体をつまむとダニの体液とともに細菌が人体に注入されることになるのでとても危険です。そのため、できるだけ皮膚科の病院で取ってもらうのがよいでしょう。もし、自分で取る場合でも、先の細いピンセットやとげ抜きで、皮膚に食い込んでいるマダニの口の部分をつまんで引き抜くようにしましょう。

「ライム病」は、早期に治療することで治すことができます。マダニに刺されて少しでも「おかしい」と感じたら皮膚科の病院を受診するようにはしましょう。時間が経過し、慢性化すると治療が難しくなります。シユルツエマダニのうち、ボレリア



写真2 マダニ類 1目盛り1mm

を保有しているものは10%程度です。また、刺されてから48時間以上経過しないとボレリアが人体に伝播することはないようですので、慌てずに対処することが大切です。「ライム病」を予防するためには、不用意にマダニが生息するような草むらや藪に分け入らないのが一番です。森林内での作業の際には、長袖、長ズボンを着用することにより肌の露出を少なくし、帰宅後は、マダニが寄生していないか身体をチェックしましょう。

森林総合研究所東北支所

鈴木 祥悟

019 (641) 2150

